2020年1月5日（日）「混じりけのない神のことば」

詩篇 12 篇

0 指揮者のために。八弦の立琴に合わせて。ダビデの賛歌

- 1 主よ。お救いください。聖徒はあとを絶ち、誠実な人は人の子らの中から消え去りました。
- 2 人は互いにうそを話し、へつらいのくちびると、二心で話します。
- 3 主が、へつらいのくちびると傲慢の舌とを、ことごとく断ち切ってくださいますように。
- 4 彼らはこう言うのです。「われらはこの舌で勝つことができる。われらのくちびるはわれらのものだ。だれが、われらの支配者なのか。」
- 5 主は仰せられる。「悩む人が踏みにじられ、貧しい人が嘆くから、今、わたしは立ち上がる。わたしは彼を、その求める救いに入れよう。」
- 6 主のみことばは混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された銀。
- 7 あなたが、主よ、彼らをお守りになります。あなたはこの時代からとこしえまでも彼らを保たれます。
- 8 人の子の間で、卑しいことがあがめられているときには、悪者が、至る所で横行します。

【序論】

改めて、新年あけましておめでとうございます。元旦礼拝に引き続き、新年礼拝でも詩篇から語らせていただきます。詩篇とは「祈り」であり、厳しい世を生き抜いた詩人たちの心の叫びそのものとも言えるでしょう。どういう状況で記されたものであるか、今となっては分からないものばかりですが、それほどに詩人が明言できなかった危険な事情があったことが窺えます。そして、それだからこそ、あらゆる時代の読者の状況に適用できるものとなってくるのです。詩人の経験は、腐敗が進む世に生きるあらゆる信仰者の前例であり、時代を越えて共通点が見出されるとき、共観、慰め、励ましをもたらすでしょう。

この詩篇 12 篇のキーワードは「言葉」です。言葉とは「人と人との間を愛と信頼で結ぶべき絆」（高橋）であり、言葉と行いの一致こそが健全な人間社会を築き上げる要です。しかし、人間の言葉はおかしくなっている。真実が欠落し、何を信じたらよいか分からない世の中。偽りの情報が飛び交い、公的文書は改竄^{かいざん}され、国会では事実がひた隠しにされる。もちろん為政者だけの問題ではありません。私たちの足元を見ても、サイズの異なる同質の問題で満ちているでしょう。偽りは私たちの中にも存在します。

【本論】

本論 1. 真実の言葉を失った世界

指揮者のために。八弦の立琴に合わせて。ダビデの賛歌

「八弦の立琴」と訳された「シェミニテ (תְּחִינִי־שֵׁׁט)」という言葉は「8番目」という意味です。詩人が所有していた八弦の楽器のことなののでしょうか。「オクターブ（8度）下げて」と解釈する人もいますが、この時代にはまだ平均律が確立していませんから、「8度」という概念があったとは思えません。

仮に、この詩がダビデによるものだったとすると、彼がサウル王に妬まれ命を狙われていたとき、ダビデの居場所を告げ口する者があったという状況が背景に見えてきます。エドム人ドエグは、ダビデが祭司アヒメレクによってかくまわれたことをサウルに密告し、激昂したサウルはアヒメレクを含む祭司 85 人を惨殺しました（I サムエル 22 章）。また、その後では、かつてダビデが助けたジフの人々さえもダビデの居場所をサウルに告げ、彼は窮地に追いやられました（I サムエル 23 章）。味方であるはずの者が手の平を返したように裏切っていく。もはやこの世に居場所を失ったかのようなダビデは、誰も信用できなくなり、疑心暗鬼となっていました。

主よ。お救いください。聖徒はあとを絶ち、誠実な人は人の子らの中から消え去りました。

(12:1)

当時のイスラエル王国の世情をよく言い表しているでしょう。神の民の倫理観が歪み切っているのです。王は民を代表する者ですから、王がおかしくなるとその社会全体に影響が及んでいきます。政府が情報操作をすれば、国民もそれに踊らされる。人間世界の闇は終末に近づけば近づくほど深まっていきます。主イエスが言われたとおりです。

そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。また、そのときは、人々が大ぜいつまりずき、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。(マタイ 24:9-12)

この黙示的な預言は、まさに今日の箇所の詩人の嘆きと共鳴します。

人は互いにうそを話し、へつらいのくちびると、二心で話します。主が、へつらいのくちびると傲慢の舌とを、ことごとく断ち切ってくださいますように。彼らはこう言うのです。「われらはこの舌で勝つことができる。われらのくちびるはわれらのものだ。だれが、われらの支配者なのか。」(12:2-4)

「うそ」「へつらいのくちびる」「二心」という三つの表現が登場します。

「うそ」(シャールヴ／אויש)とは「空っぽ」「空虚」を意味する言葉ですが、それが人と人との関係に何の益ももたらさないことは誰もが知っているでしょう。

「へつらい」(ヘルカー／הלקה)の原意は「なめらかな」であり、権力者におもねって自分の立ち位置を高める人々の偽善をよく言い表しています。

「二心」を表現するのに、原文では「心」(レーブ／לב)という言葉が二つ並べられています。心の内に真実がなく、その行動は虚偽によって動機づけられている。

このように、言葉の不誠実さは人間社会に根源的な不信感を増幅させます。仮に、すべての言葉が真実であったならば、嘘・偽りというものが存在しないなら、一体どういう世界になるのでしょうか。しかし、人の言葉は罪によって汚れている。だからこそ、救いは人に真実なことばを与えるのではありませんか。

本論 2. 神のことば

主は仰せられる。「悩む人が踏みにじられ、貧しい人が嘆くから、今、わたしは立ち上がる。わたしは彼を、その求める救いに入れよう。」(12:5)

詩人の祈りに神がお答えになりました。神の答えはどのように与えられるのか。私たちは普通、神からのダイレクトな返答を受けるといえることはないかもしれません。旧約時代、聖徒たちは祭司や預言者の口を通して神からの答えを聞きました(Iサムエル1:17、IIサムエル12:13等)。今、私たちは神の答え(御心)を聖書の御言葉を通して知ることができます。そして、忍耐をもってその御心に従って歩いていくとき、時至って神が私たちの祈りに答えてくださっていることを見出すようになるでしょう。神からの直接的な答えがないからと言って、信仰を失ってはいけません。神と人間の時間感覚が根本的に違うということをお忘れしないようにしたいのです。人間は有限なる存在であり、限りある時間の中でしか物事を見ることはできません。しかし、神は永遠なるお方であり、そもそも時間に縛られてはいないのです。神にとっては千年が一日のようであり(IIペテロ3:8)、おそらく世の始めも世の終わりも、そして人間にとっての「今」という時も、神には同時に見えているのでしょう。そのような視点に立って自分の祈りを捉え直してみると、今私たちが祈ることは、神にとっての「始め」と「終わり」と関わっているということになりませんか。神が祈りを聞いておられない？祈りに答えておられない？それは誤解です。私たちの祈りの言葉は大切に神の許に届けられ、神の聖定(永遠のご計画)と関わりをもっているのです。その答えがどういう形でもたらされるかは分かりません。確かなことは、神は聖徒の祈りを軽く見ることはなさらず、ご自身の良き御業の完成に必要なものとして記録に留めてくださっているのです。私たちはそのような信仰

をもって祈っているでしょうか。

主のみことばは混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された銀。あなたが、主よ、彼らをお守りになります。あなたはこの時代からとこしえまでも彼らを保たれます。(12:6-7)

偽りに満ちた人間の言葉に対し、神のことばの真実性が力強く謳われます。「混じりけのないことば。土の炉で七回もためされて、純化された銀」という表現は、神のことばの美しさを表す最たる聖句でしょう。何を信じたらよいか分からない世にあって、ただ一つ変わらないものがある。それが神のことばです。「銀」は、当時の通貨の代表的なものであり、人の生活を支配するものであるだけに、厳しく純化されました。「7回」とは完全性を表し、一切の不純物が取り除かれたことを言い表します。神がことばを発し給うとき、ご自身の中でそれほどの精査があるということです。そして、その「ことば」が記された聖書は永遠に変わることがない。人の世を信じられなくなった者には、「神のことば」という帰る場所があります。

本論 3. 新しい視点

人の子の間で、卑しいことがあがめられているときには、悪者が、至る所で横行します。

(12:8)

詩篇 12 篇の最後の節は、せっかく神からの答えがあったにも拘らず、再び悪い世相を嘆いて終わっているように読めます。しかし、詩人は同じ現実をまったく違う目で見ているのです。今や彼には神の視点が与えられている。彼は人間世界を飛び交う偽りの言葉に苦しみました。もはや真実はどこにも残っていないという絶望に晒されたのです。しかし、彼はたった一つ真実が残されていることに気づきました。それが神のことばです。彼には帰っていく場所があったのです。そして、この神が自分の味方であり、自分の祈りを聞き、答えてくださるという確信に至りました。この確信に立って、彼は以前と何も変わっていない世の中を俯瞰ふかんすることができた。自分を取り囲む現実は何一つ変わっていないけれど、その見方が全く違っていたのです。すべてが神の支配の下にあることを知りました。変わったのは彼自身だったのです。

「卑しいこと」(ザルース/𐤒𐤓𐤕)とは、「価値なきこと」「不快なこと」などの意味をもつ言葉ですが、この詩篇の文脈に照らして読むならば、嘘や中傷などによって人間関係が破壊されている現実を指すのでしょう。そのようなことが横行する世にあっては、誰もが絶望し、誠実に生きることを無意味と思い、諦めたくなるかもしれません。しかし、パウロは言います。

- ・ それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中であって傷のない神の子どもとなり、いのちのことばをしっかりと握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦勞したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。(ピリピ²:15-16)
- ・ あなたがたのことばが、いつも親切で、塩味のきいたものであるようにしなさい。そうすれば、ひとりひとりに対する答え方がわかります。(コロサイ4:6)

なぜ聖徒にはそのような生き方が求められるのか。それは、私達も以前は「偽りの唇」を持つ者として生きていましたが、そのようなところから神が贖ってくださったからです。私達は主によって唇が聖められ、神のことばを宣べ伝える者とされた(そのように変えられ続けている)のです。唇の聖めを視覚的に表している箇所があります。

そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」(イザヤ6:5-7)

預言者イザヤもまた、自分の唇の汚れを知っていました。しかし、彼のそのような自覚と嘆きの叫びを聞くや、神は彼を聖め、ご自身のことばを取り次ぐ者となし給うたのです。神は私達にも同じ御業をなしてくださるでしょう。

【結論】

今日の箇所は、詩人を含め、人間世界が言葉において病んでいる現実を示しました。しかし、そのような中から取り分けられ、神の真実に目を向けた詩人は、確信に満ち、神の視点に立って物事を見られるようになりました。彼は混じり気のない神のことばを見つめて生きました。私達も毎週、教会において開かれる神のことばに帰っていきます。そして、日々の生活の中で絶望するときにも、揺るがぬ神のことばに立ち返ることができます。永遠に変わることはないものを知った幸いを再確認し、この一年も主に信頼して歩んでまいりましょう。

【祈り】

偽りなき神よ。私たちは、自分を含め、人間世界が偽りに満ちていることを知っています。しかし、そのような私たちを主は贖ってくださいました。そして、神のことばを授け、それを信じ、宣べ伝える者としてくださいました。やがてすべてのことが明らかにされる日が来るでしょう。私たちは、今の世にあっても、あなたがすべてを支配されていることを信じます。神の国がすでに来ていることを、力強く宣教していくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
偽りを憎み、すべての真実を明らかになし給う、父なる神の愛、
神のことばとして世に下り、我らを贖い給うた、主イエス・キリストの恵み、
罪人の舌を聖め、新しい宣教のことばで満たし給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。